

世阿弥の『平家物語』受容について

——なぜ能『知盛』は存在しないのか——

佐々木 香 織

序

「軍体の能姿。假令、源平の名將の人体の本説ならば、ことごとく平家の物語のまゝに書べし。」これは世阿弥と『平家物語』との関わりを論じる際には、必ずといっていいほど引用される世阿弥の言葉である。しかし、この「まゝ」が何を指しているかについては、内容や詞章をそのままに書くという意味か、説話の進行までそのままという意味か、琵琶法師の語ったとおりという意味かなど様々な議論がなされてきた。このような議論が展開された背景には、ことさら「まゝ」に書けと強調した世阿弥の作品自体が、現代の我々の目にはとても『平家物語』のままとは思えない作品ばかりだったことにも一因があろう。

現代の目には「平家物語のまゝ」には見えないにしても、このような伝書を残したことが示すように、世阿弥は『平家物語』に対して一定の理解をもっており、能作の際には無思慮に『平家物語』を題材にしたのではなく、特定の理由に基づいて、ある選定基準上の

人物を己の作品に登場させていたようである。

『平家物語』の解釈について、国文学的・文献学的研究の見地では、もし『平家物語』を二部構成と見るならば清盛と義経が、三部構成ならば清盛・義仲・義経が中心人物であり、また主人公的な人物を据えられぬという立場や、運命悲劇として『平家物語』をとらえれば重盛や知盛が機軸になるという見方が提出されている。だが、世阿弥の見方はそのどれにもあてはまらない。

学術的立場を離れ、歌舞伎や人形浄瑠璃、島村抱月や吉川英治のような近代文学に目を向けても、中心に据えられるのは義仲、俊寛、義経、頼朝、那須与一、文覚、景清、清盛、仏御前・祇王、重衡などであり、一瞥しただけでも、実盛、頼政、敦盛、経政、通盛、清経、知章といった世阿弥の描く能のシテとは著しく異なっている。

つまり、世阿弥の視点は近現代の研究者の見方とも、近世から現代にかけての文芸家の見方とも異なるものであり、そこにはひとつの確立された『平家物語』の受容形態があると思われるのである。

「知盛そのときに。大臣殿の御前にて。涙を流し宣はく。

武威ノ守もうたれぬ。堅物太郎頼賢も。あの汀にて討たるるを。見捨てこれまで参る事。面目もなき次第なり。

いかなれば。子は親のため。命を惜しまぬ心ぞや。

いかなる親なれば。子の討たるるを見捨てけん。

命は惜しきものなりとて。

さめざめと泣き給へばよその袖も濡れにけり。(能「知章」)

これは、一ノ谷の合戦で親子主従三騎となつた知盛一行が、平家本陣のある船端目指して駆ける途中、敵方の武將に挑みかかられ、父を守り主君を守ろうと戦う我が子知章と家人を見捨てて、一目散に逃げてしまった知盛の苦衷の有様である。

世阿弥の作品には能「知盛」は存在しない。では、前述した一ノ谷での知盛の苦衷の物語が世阿弥の能に存在しないかといえば、それはそうではない。諸国一見の僧が一ノ谷に卒塔婆を見つけ里人による縁を尋ねると、里人は「知盛」と名馬井上黒との逸話を語って聞かせる。感銘を受けた僧が卒塔婆を回向していると、その回向のありがたさに姿を現した亡霊が、懺悔のために先に述べた「知盛」の苦衷の有様を物語る。そのような能は存在する。だがそれは、能「知盛」ではなく能「知章」なのである。

むろん能「知章」において、波しぶきを見るたびに別れた父の乗る船影が懐かしいといい、父をかばって戦つたことよって修羅道の苦患を見せる知章自身の姿もあるが、しかし語られていることの大半は、実は知盛の逸話なのである。単純に考えれば、平曲「知章

最期」のシーンが描きたいならば、他の『平家物語』を本説とする能のように、はじめからシテを知盛にし、子を見殺しにするという行為によって成仏できない有様を能「知盛」として描く方が自然であるように思われる。ではなぜ、世阿弥はそうしなかったのだろうか。なぜ、「知盛」は存在しないのであろうか。あるいはこの逸話を能の本説とするにあたって、なぜシテが知章でなければならなかったのであろうか。

知盛と知章に見られる世阿弥のこの選択には、何らかの選択基準があると思われる。『平家物語』を本説とする世阿弥の能にはいくつかの共通性があるが、しかしそれが、ことさら知盛と合致しないということはない。本来であれば、シテのもつ共通性とその傾向から、世阿弥が『平家物語』の中に何を見ていたのかを探るのが手続きとしては正当であらう。だが、『平家物語』の登場人物は全体を通じて千人にのぼるといわれるが、世阿弥の書いた能には限りがあり、世阿弥の能のシテがもつ共通性を備えているにもかかわらず、能として描かれていない人物も存在する。

つまり、存在する世阿弥の能の共通性を探るだけでは、世阿弥の『平家物語』理解に対して一元的な見方しきれないのではないだろうか。能が作られ作品が存在することに何らかの理由があるのならば、能として作られず存在しなかったということにもまた、何らかの理由があるろう。そしてその存在しない理由は、世阿弥が『平家物語』に何を見ていたかについて多くのことを示唆するであらうと思われる。

そこで本論では、存在する作品からだけでなく、存在しない作

品からも世阿弥の選定基準を探ってゆきたい。具体的には「なぜ世阿弥の能には『知盛』が存在しないのか」という問題を通じてシテの選定基準を明らかにし、それらを考察することによって、世阿弥の『平家物語』享受の在り方を明確にしてゆきたい。

『平家物語』における因果観と世阿弥の理解

『平家物語』で描かれる無常は、この世の無常を観じるからこそ求法や悟道に専心し、無常の世からの解脱・往生を希求する強固な信仰心に基づくというよりは、むしろ権力の消長や死といった変転を日の当たりに体験することで、その衰退の原因を過去に遡って詠嘆するといった感傷的な色合いが濃い。その時代の変転に対する人々の驚嘆と畏怖、そして没落や死といった悲劇的なものに直面するがゆえの悲哀の総体を『平家物語』における無常ととらえた方が感覚としては近いであろう。

『平家物語』では武将が念仏を唱え、僧兵が御輿を振り立て、人々が浄土に救済を求め、表向きは仏教的色合いが濃いようにも思われる。だがそこに通底する仏教観は、仏教を素地とした当時の人々の宗教的心情であって、仏教教理にあるようないかなる世界観もあらわれてはいない。むしろ突出した力は必ず亡びるという道義に立脚した因果観が中心となっている。戦いの勝敗、人生の禍福、天変地異、人事の吉兆の結果は人力の及ばない運命に帰し、結果から原因に遡って「悪業」や「不信仰」を没落の原因に求め、生き方への警鐘を鳴らす構造になっている。その構造においては、悲劇や瑞兆に直向してはじめて過去が回顧され原因が断定されるため、その現状

は取り返しがつかない仕組みになっており、それは同時に未来に向けて展望がないことを意味する。取り返しのない現実が眼前に迫り、未来への展望がないまま悲劇的な衰亡が進展していくときに、「人間の力によってはどうにもなしがたい力を運命としてとらえ、人間が運命をつくるのではなく、運命が人間を支配し、その未来を予定するというかんがえ方には、必然的に悲哀の情緒がともなった」のは当然であったといえるかもしれない。

先に述べたように、何かが起こる度に過去の悪行や不信仰をその原因とするように、各々の事件にその諸原因があることになっているが、『平家物語』の大枠の構造は二部構成と見ても三部構成と見ても、清盛の作った因を平家一門が負って滅亡してゆくというものである。ある結果に対して原因を遡及する『平家物語』の手続きに従って考えると、平家滅亡という事件が起こり、その原因をただせばすべて清盛の悪行であったというところえ方をしているのである。

また、『平家物語』では、平家の一人ひとりが悲劇的結末を迎えたことを総集して、その事実から帰納的に、清盛の作った悪業を全体で決済したのだろうととらえられているのではない。反対に、平家一門全体が滅亡という結果を引き受けたことを示すために、一人ひとりが悲劇的結末を辿った描写が存在するといった方がよいであろう。後半部で滅ぼされるのは清盛の因を負う平家の構成員一人ひとりであるが、誰は因を負い誰は負わなかったということはなく、それぞれの生が総集された「平家全体」が清盛の悪業を背負って没落するのである。つまり、平家にあつては個々人の功績や悪行が当

人に帰されるのではなく、個々人がいかに行為しようとするかは清盛の悪行に帰されるという構図になっているのである。

経政の琵琶青山拜領の逸話も、通盛と小宰相の逸話も、物語の彩りとして存在するのみであつて、彼らがいかに行為しようとするか、清盛の因を背負つて滅亡する平家一門という構図は崩れない。彼らは『平家物語』の大枠の構造からすれば滅亡過程の一表現にすぎないのである。清盛は自らの悪行によつて尋常ならざる「あつち死に」をする。これは清盛の行為が清盛に帰していることを示している。しかし、敦盛がいかに笛の達者であつても、忠度が千載集に採録されるほどの和歌の上手であつても、彼らの行為は『平家物語』の進行と関わる形で彼ら自身に帰すことはない。

世阿弥はこの道義的因果観という視点で『平家物語』を読み、『平家物語』全体を通じて展開される因果応報の構造そのものを能として表現しているのではない。しかし、この構造自体は理解しており、個人の行為が個人に帰す構造と、個人の行為が全体に帰す構造を把握し、それを踏まえて能作していただろうとは思われる。

世阿弥の能に登場する平家の武将を検討すると、清盛の悪行を背負つて滅亡した「集合体としての平家」をあらわす一表現として使用されたにすぎない人々であることが確認できる。忠度、敦盛、経政、通盛、清経、知章など、前半部において悪行の描写も善行の描写もなく、あるいはほとんど登場することさえなかつた者達がシテとされている。

世阿弥は、平家の武将をシテとする際には、一表現にすぎなかつた者達に脚光を当て、全体として滅びた者達が個々人としてはいかに

に生きたのかを描くことで、彼ら自身の物語をそれぞれに与えているのである。

『平家物語』における運命と世阿弥の表現

「御運だに盡きさせ給ひなば、是等百人千人が頸斬せ給ひたりとも、世を取らせ給はんこと難かるべし」というように、その因果観と密接に結びついて『平家物語』には運命という言葉が多用されている。しかし、世阿弥はこの運命という概念を重視したのではないと思われる。

平家の武将である知盛は「見るべき程の事は見つ」という最期の言葉によつてよく知られているが、彼は全体の流れの中では必ずしも物語を主導した人物ではない。知盛の視点が重視されるのは、『平家物語』に「運命」を積極的に読みとろうとする場合に限られ、『平家物語』を解析する際多用される「無常」や「盛者必衰」といったタームが用いられる場合に彼を範例として用いることはないように思われる。

何らかの概念用語によつて物語を分析するということは、「……そこに浮かび上がるのは作品それ自身ではなく作品を解析しようとする側の方法なり立場なりであるというしくみになっているのではないか。」という側面をもつと思われる。つまり、知盛や重盛の視点から『平家物語』をとらえれば「運命」という要素が浮かび上がるだけでなく、『平家物語』から積極的に「運命」を読み込みたいと思う人間の目には、知盛や重盛が映ってくるという構造にもなっているのではないだろうか。それゆえ世阿弥が知盛や重盛をシテに

据えなかつたということからも、彼が『平家物語』に「運命」という要素を読みとらなかつた、あるいはそれを重視しなかつたという可能性をも示唆していると考えられる。

そして何より、『平家物語』を本説とする世阿弥の能には、およそ運命、宿命、御運などにそれに類する言葉すら登場しないことが、世阿弥が運命という概念を重視していなかつたことを示していると思われる。単純に言葉が用いられないだけではなく、能の中では、平家滅亡の運命と修羅道や没落という状況が結びつけられることもほとんどなく、行為の責任はあくまでシテ当人に帰されることになつてゐる。能に登場する武将の亡霊の多くは、

「御平ひのありがたさに。これまで現れ参りたり(能「経政」)」

「現の因果を晴らさん爲に。これまで現れ来りたり(能「教盛」)」

「恥かしや亡き跡に。姿を返す夢の中。」

覚むる心は古に。迷ふ雨夜の物語。

申さん爲に魂魄うつりかはりて来りたり(能「忠度」)」

と、懺悔のためか、あるいは回向のありがたさに僧侶の前に姿を現すのだが、それはあくまで自己の行為の懺悔という形をとる。彼らは現世での自己の在りようを語ってみせ、死の直接的原因となつた戦話をした後回向を頼んで消えてゆくが、その際語られるのは、戦いによって修羅道地獄に墮ち、その苦患を味わつてゐるということであり、修羅達の理解では、地獄の苦しみは自己の行為によつてもたらされたものであつて、『平家物語』にあるように清盛の悪業

の報いを受けて地獄にあるとはいつていない。

「げにや最期の有様を。慙愧懺悔にあらはし修羅道の苦患免れん
：親を討たせじと。知章かけ塞がつて。
むずと組んで。どうと落ち。取つておさへて首かき切つて。

起き上る。處を又。敵の郎等落ち合ひて。
知章が首を取れば。終にここにて討たれつづ。

そのまま修羅の。業に沈むを：(能「知章」)」

知章は、父をかばつて戦つたことによつて修羅道の苦難を受けてきたと説明している。そしてそこでは、戦いに敗れたことや敗死の木の修羅道地獄、あるいはそもそも源平の争乱自体が運命であつたという理解はなされてゐない。清盛という個の行為が平家一門という全体に帰すことが『平家物語』の因果であり、それによつて滅亡することが運命ととらえられてゐるなら、能の中ではあくまで知章の行為が知章の未来を決定したと考えられており、「運命」によつて左右されたとは考えられてゐないのである。

知盛も知章も「集合体としての平家」を構成する一員である。だが、知章が選択され知盛が選択されなかつたということは、その中にさらに知盛と知章を分け隔てる基準があるということである。もし、世阿弥がシテの選定基準として「運命を覚知しているかどうか」あるいは「運命を体現しているかどうか」を重視しているなら、知章ではなく知盛を選択したという可能性が高い。しかし、その基準に照らして知盛ではなく知章が選択されたということは、世阿弥の

基準は「運命」にはなかったということを意味しているのではないだろうか。

現世への未練と執着

「平家」の世界では、死が事件などではなく、絶対的な運命として捉えられる。その時生と死の構図は、死から見られた生、という形をとる。能もまた「平家物語」とは異なる意味において、生と死の構図は「死から見られた生」という形をとっている。それは、諸国一見の僧が武将ゆかりの地を訪れ亡霊と邂逅するという、いわゆる夢幻能の形式である。夢幻能では、死後自分の過去を回想する亡霊達は登場するが、生きて活躍する平家の武将はひとりも存在しない。つまり、世阿弥が「平家物語」に題材をとり平家の武将をシテとした作品群は、すべて死からはじまっているのである。

しかしながら、死から出発したとしても世阿弥が描いたのは死の世界であるということではない。なぜなら、すべての物語が死を契機としてはじまったとしても、そこに描かれているものは、武将達が生きてあつたときの武勇であり誉れであり「死から見られた生」の在りようだからである。夢幻能において、死は生の延長上に連続的にあるのではない。死んだ後に改めて自己の生をとらえ返すことで、自己の生と死の意味を見出す構造になっているのである。

シテは生前の己を回顧するとき、須磨での侘び暮らし、九州での流浪、壇ノ浦での苦衷も語るが、それ以上に語られるのが己の執着についてであり、それを勇壮な合戦の様子や美しい夜遊の有様として見せるのである。僧侶の回向にひかれて甦った修羅達は、

「ありがたしありがたし。

とても懺悔の物語夜すがらいざや、申さん(能「敦盛」)

と、現世にあつた自己の生を物語る。

「…妄執多き娑婆なるに。

何なかなかの千載集の。歌の品に入りたれども。

勅勤の身の悲しさは。読み人知らずと書かれしこと。

妄執の中の第一なり。(能「忠度」)

「青山の御琵琶。娑婆にての御許されを蒙り。

常は手馴れし四つの緒に、

今もひかるる心故。(能「経政」)

世阿弥の眼は、武者達が死に臨んでいかに生きたかに注がれている。修羅達は千載集や琵琶青山に執着するゆえに成仏できないと語るが、翻ってみればそれは現世での誉れであり愛着であつて、現世自分が何を支えに生きていたかを示すものである。つまり世阿弥の能では、死から生を逆照射することで彼らの生の意味を問うているのである。ここでシテが語る執着は必ずしも否定的に表現されるばかりではない。懺悔のために現世での在りようを語り進めるうちに修羅達は

「一聲の鳳管は。秋秦嶺の雲を動かせば。

鳳凰もこれにめでて。梧竹に飛び下りて。

翼を連ねて舞ひ遊べば。律呂の聲々に。

情聲に發す。聲文をなすことも。

昔を返す舞の袖。衣笠山も近かりき。

面白の夜遊やあら面白の夜遊や、(能「経政」)

「それこそさしも敦盛が。最期まで持ちし笛竹の。

音も一節を謠ひ遊ぶ、今様朗詠、聲々に、

拍子を揃え聲を上げ、(能「敦盛」)

と楽の音に誘われて舞を舞いだす。舞台上では実際にこれらの詞章が謡われた後、中の舞やクセ舞といった優美な舞が展開される。風雅の楽しみだけではなく、親子・夫婦の恩愛にも修羅達は執着している。

「うたたねに戀しき人を見てしより。

夢てふものは。頼みそめてき。

いかにいにしへ人。清経こそ参りて候へ(能「清経」)

と恋しい妻の夢に現れ、

「朧なる。雁の姿や月の影。雁の姿や月の影。

うつす繪島の鳥隠れ。惜しとぞ思ふわが父に。

別れし船影の跡白波もなつかしや。(能「知章」)

と父の乗る船影が消えゆくのを名残惜しがる。知章は敵方の武将が

「…新中納言に目をかけて。駆け寄せて討つ處を。

親を討たせじと。知章かけ塞がつて。

むずと組んで。どうと落ち。取つておさへて首かき切つて。

起き上る。處を又。敵の郎等落ち合ひて。

知章が首を取れば。

終にここにて討たれつつ。

そのまま修羅の。業に沈む…(能「知章」)

というように父を討たせまいと戦ったことよって修羅道の苦患を受けていると語るが、死を賭して守った父への愛情を捨てることはない。自分を見殺しにした父への恨みも憤りもなく、「重ねて弔ひて給へ」と父の菩提も弔ってくれるよう頼むのである。このように、修羅達はみな、現世にあって己を支えたものへの未練を捨てきれずに現世へと廻り、その妄執を恥じ、執着を捨てたいと願いながらも、懺悔の語りの中で当時を懐かしみ舞い謡うのである。

なぜ能「知盛」は存在しないのか

では、知盛はどうであろうか。知盛もまた、死を賭して一門のために戦い、平家再興や源氏討伐に執着を残しているのではないかと想像できる。しかし、世阿弥はそのように知盛を描かず、知盛が井上黒の名馬を残す逸話と知盛が我が子を見殺しにして泣き濡れる逸話を能「知章」として描いているのである。

知盛と、他のシテとされた武将との相違は、知盛が自己自身の行為についてその罪業をすでに自覚し、現実においても来世においても救済を期待していないであろう点ではないだろうか。知盛は、平家のために全力を捧げ、その最後を見届け、志操に殉じて死んだけれども、現実の状況にも来世での救済にも絶望していたのだと思われる。なぜなら彼は信念に殉じて平家のために戦う中で、命惜しさに我が子を見殺しにしたからである。

「いかなければ子はあて、親をたすけんと敵にくむを見ながら、いかなる親なれば、子のうたるるをたすけずして、

かやうにのがれ参て候らんと、

人の上で候はばいかりもどかしう存じ候べきに、

我身の上になりぬれば、

よう命は惜しい物で候ひけりと、

今こそ思ひ知らされて候へ。…〔知章最期〕

源氏は主君と家人の主従関係を重視し肉親同上で相争うことも多いが、平氏一門は何より血族間の関係、とりわけ親子兄弟といった近しい肉親を重視する傾向にある。今日においても、親を助けようと敵に刃向かう我が子を見ながら、我が身かわいさに遁走する親がいれば、人非人の誘りは免れないであろう。ましてや親子の恩愛関係をことさら重視する平家にあつて、しかも武勇をもつて知られた新中納言知盛が、命惜しさに我が子を見殺しにしたのである。知盛の兄宗盛は、知盛が泣いて自己批判する中で

「手もきき心もかうに、よき大將軍にておはしつる人を。

清宗と同年にて、今年は十六な〔知章最期〕

と知章を惜しみ我が子清宗を見やる。宗盛は弟に同情し甥の死を悼んでも、やはり他人事としてとらえており、自分もいずれ我が子を見殺しにする状況が訪れるのではと震撼するようなことはない。鎧の袖を濡らさぬ者はなかつたといえども、人間の執着心の恐ろしさを真に思い知らされたのは、やはり知盛のみであつたと思われる。

知盛はその行為を反省する上で、武士であることや平氏であること以前に、彼個人が背負わなければならない罪業があることを自覚したのであり、それは主君のため家のためには忠実であつても、自己の行為に対する罪業に無自覚に死んでいった武将達とは異なる点である。仮に知盛がそのまま生き延び、己が力で平家を再興したとしても、信念を曲げる以上に卑劣な行いをしたという罪障がはたして彼の心から消えただろうか。

知盛はすでに現世において白らの罪業を自覚したが、その感情ゆえに現実逃避的に死を選択することもなかった。厭世的に死を選ぶのは嫡流である小松家に顕著であり、小松家の嫡男維盛と三男清経は入水自殺を遂げた。平家一門の中で自殺した者はこの二名のみである。三男清経は世阿弥の能のシテとされているが、彼の罪業の自覚は世阿弥の能の中でも特殊である。

清経は他の平家の者達と同様都を追われ豊前国柳ヶ浦に落ちのびる。かつての小松家の家臣に攻められ、宇佐八幡の神託によって平

家の滅亡を告げられ、絶望の中で自分の確実な死を予想したとき、清経はそれでもなお決められた戦列にただ加わって平家のために戦って死ぬことの意味を見失う。

「あじきなや。とても消ゆべき露の身を。(能「清経」)

彼は一戦も交えることなく入水するが、修羅道地獄に墮ちて初めて

「いふならく。奈落も同じ。うたかたの。

あわれは誰も。変わらざりけり。」

ということに気づくのである。死ぬ定めぬ命に果敢なきを感じて命を絶つ決意をしたが、死後もその果敢なきには変わりがなかったと、修羅道地獄に墮ちたその苦渋を舞ってみせるのである。彼は罪業を自覚したゆえに厭世的に死を選ぶのではなく、厭世的に死を選んだ結果、武上として生まれた者は戦わずとも修羅道に墮ちるといふ修羅の罪業を自覚したのである。武士として生まれてしたこと自体からすでに自らの罪業がその身に備わっていたことを清経が死んで初めて自覚したように、世阿弥の能に登場する武将達は、このようなもって生まれた罪業を生あるうちは自覚していないのである。

絶対的な罪の自覚によつて現世にも来世にも希望を持たず、それでもなお現実には立ち向かい平家の最期を見届けた知盛は、その死後一体何に拘泥するだろうか。あのとき命惜しさに逃げ出してしまつたという後悔の念を抱いて、僧侶に回向を頼むだろうか。むろん我

が子を見殺しにしたことに後悔はあるだろうか、何かが果たしえずに現世へ甦る未練が、彼にとつてはなかったのではないだろうか。未練は「あきらめきれないこと」であつて、悔恨とは違う。知盛は我が子を見殺しにした行為を「やりなおしたい」と思つてはいても、「あきらめきれない」とは思つていないであらう。我が子を見殺しにした苦衷は、知盛にとつて決して肯定的なものではない。つまり、世阿弥は知盛が死してなお現世に未練がなかったゆえに能としてあらわせないものではなからうか。それが、能「知盛」が存在せず、能「知章」が存在する理由であると考えられる。

以上のことからいえるのは、世阿弥は「平家物語」に通底する運命や因果という考え方は看取しながらも、運命や因果そのものを表現するといった視点で能作したのではなく、その運命に滅ぼされざるをえなかった「集合体としての平家」の一人ひとりに脚光を当て、彼らの生が何であつたかを死後に振り返らせるという形式で、彼らが死してなお未練を残し、煩惱となるものについて描いたということである。その煩惱となるのは、悔恨や復讐といった現世にあつて否定的にとらえられていたことではなく、死してなおやまぬ武者の誇りや恩愛の情、芸術への愛好といった現世で肯定的にとらえられていたものである。

世阿弥は登場人物それぞれの死の意味を彼なりに分析し、忠義や恩愛の情といった人の心の美しさや、琵琶・笛・和歌といった芸術的に美しいものをクローズアップしている。それは彼の関心が、解脱・往生を一心に念じて仏道に邁進する仏教的要素や、ギリシャ悲劇的な運命にあつたのではなく、舞歌として美しく恩愛や忠義と

いった物語として美しいものにあつたことを示しているが、このことは、世阿弥がそれらのものを好んだということ以上に、舞台表現に何がふさわしいかという問題であると思われる。

世阿弥の時代のみならず現代においても、舞台表現では倫理的に善であることや宗教的に絶対であることが価値をもつとは限らない。むしろ反対に、現実にはありえない残酷な場面や不道德な登場人物が好まれることもある。世阿弥は舞歌を基調とした舞台にふさわしく、まず風雅にゆかりのある人物を選んだと想像できる。そして、これまで考察してきたように、死後もそれらに未練を残し、現世に執着していることが選定基準のひとつであるとすれば、仏教的には煩惱にまみれた亡者であつたとしても、そのような人物が舞台表現には似つかわしく、また聴衆にも愛されたことを意味している。つまり、世阿弥の能に必ず僧侶が登場し回向し教えを説いていたとしても、そこで表現されているのは仏教教理やその威光そのものではなく、むしろそれらに頼る以外に救われる道がないほどの現世肯定が表現されていると考えることもできるであろう。源平争乱期以降江戸時代に至るまで、驚くほど長く争乱の世は続き天下は麻の如く乱れた。そして、そのような人災のみならず度重なる天変地異の中で醜酸された気運から、鎌倉新仏教が生み出されたといわれている。しかしそのような争乱期にあつても、支配階級のみならず庶民達も、能見物をする心のゆとりがあつたのであり、登場人物が死してなお現世の執着を捨てられない有様を見たがつたのである。このことは、中世の人々の現世肯定的な一面をあらわしているとはいえないであろうか。

註

(1) 世阿弥「三道」三休作書条々

以下、世阿弥の伝書に関しては表章・加藤周一校注「世阿弥禅竹」日本思想史大系、岩波書店、からの引用とする。

(2) 現在能楽堂でも上演される「知章」の謡曲詞章は、六百年近い年月によって変化している可能性もあり、現行曲と「平家物語」を単純に比較することはできない。だが幸いにも、現行曲「知章」には世阿弥自筆の「トモアキラノ能」が残されているため比較が可能であり、両者は小異があるにすぎない。特に問題となる部分は「トモアキラノ能」との異同がなく、「トモアキラノ能」には字句の欠損があるため、今回は観世流現行曲を参考にした。

以下、謡曲の詞章に関しては、佐成謙太郎「謡曲大観」明治書院、一九三一、からの引用とする。

(3) 石母田正「平家物語」岩波書店、一九七五、二〇五頁

(4) 西田耕三「平家物語構造覚書」、『日本文学』、一九七三、二二卷

「平家物語」における個の原理と集団の原理の二律性という視点に大きな示唆を受けた。

(5) 石母田正「平家物語」岩波書店、一九七五、大野順一「平家物語における死と運命」創文社、一九七八など

(6) 松尾葦江「叙事と抒情」、『別冊國文学』、一九八六、No.一五、三六頁

(7) 西田耕三「平家物語構造覚書」、『日本文学』、一九七三、二卷、一六頁

(8) 「知章」の謡曲詞章に関して、世阿弥が平家諸本のどれを用いて能作したかということも問題である。先行研究によれば、一方流の覚一本よりは八坂流の後期に属する本が謡曲に近く、典故となったのは中院本やそれに近い八坂系諸本であり、さらに一方流の語りも参考にしていたのではないかといわれている。(荒木良雄「世阿弥の典故とした平家物語」、山下宏明「室町時代の平曲に関する一考察」など)この部分は特に覚一本に近いと思われるので、本文中では覚一本を挙げた。参考までに中院本(高橋貞一編著「平家物語(中院本)」と研究(二))未刊国文資料、一九六二)を挙げておく。

『平家物語』(巻九) 中院本

「…新中納言、おほいどの、御所にまいりて申されけるは、むさしのかみにもおくれ候ぬ、よりかたもうたれ候ぬ、されば子は、親にくむかたきの中にへだ、り候に、いかなる親なれば、かたきにくむ子を見すて、かへし候はさりつる事の、身なからも、命はおしかりけりと存候、人の上ならば、いかばかりもとかしくも候なんとて、なかれければ、おほい殿、…」

(ささき・かおり 筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科)